RNC 西日本放送ラジオ番組

CHIT CHAT RADIO 子育て CHAT ROOM

2021 年 10 月 19 日 15 時 13 分～15 時 35 分

子どもの安全を考える～赤ちゃんから思春期まで～

鈴木裕美先生です、こんにちは。よろしくお願いします。

こんにちは。お願いします。

鈴木先生、今回は子どもを守るための安全対策について教えて頂こうと思いますが、子どもを守るための安全対策といっても、年齢によって変わってきますよね。

はい、そうです。赤ちゃん、幼稚園、小学生、中高校生では危険の中身が違うので、それをまず知ることが、安全対策になりますね。

確かに一歳前のはいはいしているぐらいの時っていうのは、ものすごい高速はいはいの赤ちゃんは別にして、動ける範囲が予想できるんですが、一歳ぐらいで歩き始めの時はまだよちよちしていて、すぐ転びそうで。

掴まったところで、その物と一緒に倒れちゃうとかね、そんなこともありますよね。

気がついたら、えらい高いところまで登りましたねっていうこともあったりしましたね。

ありますよね。子どもって小さい頃は四等身ぐらいだから、頭がものすごい重いんですよね。だから、頭から下に落ちるとか、転ぶとかっていうのがよくありますよね。

私も子どもが小さい時に二階のベッドで一人で寝かせてたんです。ダブルベッドのど真ん中だから大丈夫かなと思ったら、ちょっと目を離した隙にドーンと音がして、ベッドから転げ落ちてたんですね。これはもうどこを打ったかわからないって言ってそのまま病院に連れて行ったら、「大丈夫ですよ。子どもは柔らかいから大丈夫」って言われたんですけど。何日かは急変しないだろうかと心配でした。親としては、目を離すんじゃなかったと後悔しました。家族にも怒られましたし、もうしょんぼりでした。

お母さんはこう言った時はものすごく自分を責めちゃうでしょうね。

子どもがよくベッドから落ちたとか、転んで頭打ったっていうのでよく病院に来ますよね。

やっぱりそうですよね。

でもとりあえず泣けばね、意識もしっかりしてて、しっかり泣くのなら、様子見ましょうかって言って帰ってもらうことが多いですね。

確かに、そういわれました。すぐ泣きましたかって。そこ一つのサインなんだそうですね。

そうですね、逆に泣くこともできないぐらいぐったりしてたら心配ですね。

やっぱり、専門医に一刻も早くということで。

そうですよね。画像撮ったりとかしないといけないかな。

すぐに泣くのは、まあ大丈夫よっていうサインなのかもしれませんけど、まぁ一歳二歳ぐらい、なんか動き始めたと思ったら突然高いとこに登ったりとかしますよね。

そうですね。多いのがやっぱり転倒、転落ですね。あと、お風呂場で溺れるのも多いですね。水位がたった十センチぐらいでも、小さな子どもは倒れたら水で口や鼻が覆われて窒息して亡くなるってことが多いんですね。溺水は他の事故よりはすごく少ないんですけど、救急搬送される半分以上が重症になるので、気をつけないといけないんですよね。

私の一人目の子どもが小さい時、そういう危険性がわからず、夏にバスタブに十センチくらい水を貯めて遊ばせてたんですよね。自分はなんとリビングでお茶飲んだりして。しかも結構長い間遊ばせてて、そのうち、ギャーって聞こえたから行ってみたら、うんちが水にプカプカ浮いてたことがありました。その時は、笑い話で終わってましたけど、今から思うと子どもが溺死してたってことも十分ありえましたので、自分で言うのもなんですけどネグレクトですね。でも、そういうことが危険であることを知らなかったのが問題ですよね。知ってるってことが安全対策になる。

家の中、暑い夏、子どもも楽しんでくれるだろうという、プラス方向で安心してしまうとこがお母さんとしてあったんでしょうね。リスクに関する知識が増えてくると、ここは危険だぞという意識ができてお風呂で遊ばせることは、気をつけないといけないとわかる。

そうなんですね。

やっぱり親がどれだけ危険を回避できるかとか、そういう危ないものを周りに置かないかというところになってくるんですね。でも、もうね、手を出し過ぎるのも子どもの成長には

良くないって言うし、出さなさすぎるのもいけないしで、もうどうしていいのかわかんなくなってしまってるお母さん方もいるのではないかと。でも、子どもが小さいうちは親ができるだけその危険なものを排除していくということですね。

そうですね。それは子どもの安全のためでもあるんですけど、親の精神衛生上にも良いですね。子どもはすぐ物を倒したり、壊したり、怪我するから見てないといけないですが、特に最初の子はより目を光らせて、いつもあれダメ、これダメ、そこ行っちゃダメ、それ触っちゃダメって怒ってしまいがちですよね。子どもはわーって泣くし、すごくしんどくなる。

それわかります！ダメダメばっかり言うので、臆病な子になってるなって気がします。

子どもは欲求不満にもなるでしょうしね。

だから、安全な環境にしておくのが、親の精神衛生上にもいいし、子どももダメダメ言われずに遊べるのでいいですよね。年齢に応じて、例えば物を口の中に入れて楽しむ、確かめる年齢では、口の中に入れちゃいけない物は子どもの手の届くところに置かないようにする。そうすれば、ダメだって叱ることもないし、一秒一秒監視する必要もないですから。

でも、お子さんが生まれる前は、夫婦二人の暮らし方ってあるじゃないですか。お気に入りの物を置いたりだとか。子どもの誕生は喜ばしいんだけど、それも取っておきたいっていう思いがあったりして、そこでぱっと切り替えないといけませんね。

そうですよね。

部屋のレイアウトから置いているものの高さからすべてね。

私、家の中に観葉植物を置いていたんですけど、子どもが掴まって、全部ひっくり返した時に観葉植物は置けませんって悟りましたね。（笑）あとゴミ箱。床に置くものですよね。それを一歳ぐらいから本棚の上に置き始めて。今もその感覚が残っていて、ゴミ箱が上にあるっていう。高いところに投げるみたいな。（笑）

運動会みたいですね（笑）

はい、玉入れみたいになってるところがあります。（笑）小さい頃の安全対策は、親ができるだけして、お互いがストレスかからないようにという話でしたね。もうちょっと年齢進んで小学校に入ってからは、また変わりますよね。

そうですね。交通安全ですかね。自転車に乗る時は、ヘルメットをつけましょうとか。あとシートベルトをつけないで車に乗っていて、交通事故に遭うっていう。

後部座席とか？

はい、そういうのも多いですし、あとは水の事故ですね。ため池で溺れたり。ライフジャケットを使っていると違うんですが。

香川はそうですね、用水路、ため池というのは危険ですね。

そうなんですよね。今、香川県でチャイルドデスレビューという取組があって、子どもの死亡事例において、多職種の専門家が集まって死亡の原因や状況を調べるんですね。そして、どうすれば予防できたかを話し合い、予防策を提言する子どもの安全を守るための活動なんですね。日本全国で始まっていて、香川県でもやっているんですね。私もそのメンバーに入っているんですが、検討事例にはライフジャケットやシートベルトを装着していれば、死なずにすんだのではないかというケースもありますね。こういうことを知っているかどうかで全然変わってきますよね。ライフジャケットも一着数千円するので、使用頻度が少なくて、すぐサイズも合わなくなるとなると、なかなか買えないですよね。小学校や役場でレンタルする市町もあるんですけど、なかなか普及してなくて課題になっています。

「ちょっとだけだからいいか」じゃなくて、できれば危険の芽は一つ一つ確実に摘んでいくことで、後悔してしまうということだけは避けたいですよね。

そうですね。また子どもが増えると、想定外なことが起こりやすいですよね。私の子どもがまだ赤ちゃんと二歳ぐらいの時に、私が赤ちゃんに耳かきをしてあげてたんですよ。そしたら上の子が目を離してる隙に、耳かき棒を赤ちゃんの耳に突っ込んでたんです。私がするように掃除してあげようとしたんでしょうが、赤ちゃんの泣き声で気が付いて。

加減が難しいですよね。

加減というより、耳かき自体を手の届くところに置いておいちゃいけませんでした。子どもは親がやることを見て、よく観察してて、それをやってみようとすることはあります。

そういう心理が働きますもんね、やっぱり。親のやっていることをやってみたいっていうのは。それも成長だと思うんですがね。あまりダメダメって言わずにやらせたいんですが、耳

かきは赤ちゃんには危ないですけどね。じゃあ、自分の耳でもちょっとごめん、やらせられないって話にはなるんですけども。（笑）

いずれにせよちょっとね。（笑）

ごめん、やらせられないって言うのをできるだけ減らしてあげたいと思うのが、包丁を使うことなんですが、まぁ、うるさい私は。それならやらすなよって話なんですけど。

やっぱり包丁は危ないものっていうイメージがあるんですけど、包丁の使い方は、ある一定の年齢になったら覚えた方がいいとか、アウトドアだったらナイフとか、教える際のコツとか注意すべき点はあるんですか？

いつ包丁を持たせるかというのは、子どもがやりたいと言った時にやらせてあげるのが大事かなと思います。

あと、こうしたら安全だよっていうやり方をよく教えて、一緒にやっていくと楽しい時間が過ごせるし、ノウハウが身につきそうですね。

そうですね。大人にとってはやることが慣れていて簡単だから、すぐやってごらんって言うけど、ステップを少しずつ区切って教えるのがいいと思います。まず、例えば包丁の持ち方で一つのステップにする。

左手の添え方はどうしたらいいよとかね。

そうですね、次はちょっと切ることとか、で切った後にちょっと寄せる方法とかね。そういうステップに分けて少しずつ少しずつ教えるってことです。

これは大事なことですね。包丁の使い方を安全に覚えていくっていうのはね。

なかなか口も手も出ちゃって、自分の気持ちとの葛藤ですね。あんまり言いすぎると子どもにうるさがられるし。

そこで自分がやってできた、大人がすることができたっていう達成感を大事にしてあげたいですよね。

そうですね、上手に持っていけたらいいんですが。日々反省しつつやってます。

大人でも怪我するじゃないですか。私もよく自分の指切ったりしてますよ。

今もですか？

はい、この間もキャベツ切ってて自分の指先を切り落としちゃいました。

だいぶ切ってますよ！

まな板に落ちてたから、洗ってちゃんと戻してサランラップで巻いておいたら、半日でくっついてました。（笑）

すごい話ですね。

そう、病院行かなくても何とかなりました。縫わなくてもいいんですよ。ちょっと話がずれちゃいましたけど。すみません。（笑）

医学部の先生ですからね。

いや、土曜日の午後で、先生がお家で待機されてるのに呼び出すのは悪いなと思って、自分でちょっとやってみたら、なんか案外くっついたと。（笑）

専門知識のある人でこの程度だったらいけるっていう判断が多分、無意識のうちにできてるんですよね。特別な例だと思いますけれども。

でもね、サランラップ療法ってあるんですよ。（笑）

では、もしもの時はそうしてみてください。（笑）いやだけど年齢ごとにね、安全対策っていろいろあるなと思いますけれども、親が予測つかないところでの対策もいろいろありますよね。例えば、ゲームとか友達とのメールのやりとりとかネットの繋がりのこととか。先生は香川の教育委員会と一緒にお仕事して、ゲーム依存予防を専門的にやってらっしゃるということで、詳しいかと思うんですけれども。まずはダメだって言う前に、先生がいつもおっしゃっているのが、親子の関係性というところが、安全対策に繋がっていくということですね。

そうですよね。子どもが何か危ないこと、なんかまずいなって思った時に、怒られると思

って言えないことがありますけど、それを大丈夫かなって相談できる関係は大事かなと思うんですよね。

私、里親会に入っているんですけど、この間、里親会の勉強会があったんですよ。養護施設の先生がおっしゃってたんですが、そこに住んでいる養護施設の高校生にスマホを持たせるんだけど、一切フィルターをかけないんですって。みなさん、普通与える時にいろんな安全フィルターをつけたり、対策をするじゃないですか。だけど、わざとつけない。養護施設の子どもたちは十八歳になったら施設を出て自立しないといけないんですね。そうすると大人が守ってあげられない。だから、失敗は自分が近くにいる時にさせるんだって。

そうすると子どもたちはスマホを喜んで使ってるうちに、いろいろとトラブルを起こすわけです。でも、それでいいんだって。トラブルを経験してもらって、自分がそばにいる時に尻拭いができるからって。それが重要なことだって言ってました。

私達は子どもが十八才まですごく厳しく制限して、子どもを危険から守ろうとするんですよね。時間制限してみたり、あれダメこれダメってやるんだけど、案外大学で県外出たり、就職で一人暮らしとかしたら、ノータッチになっちゃうんですよね。どんなふうにスマホを使っているか、ゲームをしているかなんて無関心になってしまうというか。急に自由になるから、トラブルも起こりますよね。いろんな問題が起きても親に相談できればいいんだけど。

逆に言わないっていう知恵も出てくるし、どうにか自分でやろうとか、言いづらいとか。

そうですね、だから「一緒に暮らしている間に失敗させる」っていうのは一つの安全対策なんだって、養護施設の先生に教えてもらいました。

それは考えさせられますね。

そうなんです。子どもを守るために失敗させる。深いですよね。

自由意志でさせる、自分の責任のもとにおいてさせるんだけれども、放りっぱなしじゃないよっていうところが、これは一つのあり方としてすごくいいなと感じますね。

そうですね。だから、いろんなことを制限してさせないっていうのは、子どもの安全のためだと思っているけど、実は親の不安解消のためだったりしますね。もちろんね、それも大事なことなんですけど、子どもが失敗から何を学ぶかとか、自立してから本当に安全に暮らせるかっていうことを目標にしないといけないのかなって思いました。

自分で考えることが身につくかもしれません。教えてもらってない、聞いてないっていう言い訳ではなくて、自分で考えて行動したことに伴ったリスクは、どうやって解決するかって

いうところまで思いが至るわけですから、精神的な自立を促すという意味では非常に有効だと感じますね。

そうですね。

そこまでに私も親の覚悟が育つように、親側も頑張っていきたいなって思います。まずゴミ箱を下におろしてみると、いやそんな覚悟じゃない。（笑）

でもそれも一つ大事な工夫ですもんね。

また下に置いた時はご報告します。

お願いします。（笑）

鈴木先生、今後の予定も教えていただいてよろしいでしょうか？

はい。今日は「ハイスクールプロジェクト」っていうパンフレットがもうすぐ発行されるので、そのご紹介をさせていただこうと思います。こちらは「多様な進路先を探そう、定時制通信制編」ということで、全日制高校以外の進路先をたくさん紹介しています。学校紹介の他にたくさんの体験談、学校を見学する時、進路を決める時のポイント、親としての心得、高卒認定試験など幅広い情報がいっぱいです。全部で八十二ページあるんですけど、現在、「親の育ちサポートかがわ」のホームページで見ることができます。もうすぐ全県の中学校に配布しますのでお楽しみに。

はい、先生お忙しい！鈴木裕美先生、今月もどうもありがとうございました。

ありがとうございました。